

プロジェクト・スコープ

# 世代論から展望する これからの生き方と社会

中間 真一 HRI 社会研究部 主任研究員

時代の大きな転換期を迎え、既存の価値観が揺らぎ始めている日本。これまでのライフスタイルや価値観に代わる新たな座標軸を見いだし、豊かな明日を拓くための効果的な処方せんはあるのだろうか。世代を横断して実施したアンケート調査と、各世代の当事者と関係の深い作家のみなさんが描き出した世代論をもとに、これからの社会と生き方を展望してみた。



写真 / 岩松喜三郎

Kisaburo Iwamatsu  
1946年、仙台市生まれ。東北学院大学経済学部を経て東京総合写真専門学校を卒業。藤森秀部の助手を務めた後、フリーカメラマン。日本写真家協会所属。74年『太陽の昇りくる島』ニコンサロン 展はじめ、写真展を多数開催。主な掲載誌は『毎日グラフ』、『フォト』、『別冊太陽』、『アサヒカメラ』、『週刊読売』、『東京人』、『潮』ほか多数。

アンケート調査の分析は、科学的だし説得力がある。しかし、これにはかり頼つて結果をすくいとると、たくさんエキスを編み目から逃がしてしまい、もったいない。一方、心をくみとって描き出し、心に訴えかける活動をしている作家の方々は、優れたセンシング力で、隠れた大事なものを嗅ぎとる。そこで、両側から取りこぼしのないよう追ってみた。

いま、これからの生き方を探るために

HRIが今回の世代別価値観・ライフスタイル調査をスタートしたのは21世紀の幕開けとなる2001年のことであった。01年にシニア世代（50〜79歳）、02年にミドル世代（35〜49歳）、03年にヤング世代（20〜34歳）と世代別に毎年調査を実施してきた。少しでも本音、深層、近未来の世代像を浮かび上がらせるため、調査方法としては単にアンケート調査の結果のみならず、手間暇がかつたが、質的な調査にも注力した。個別やグループでのインタビュー、世代に特徴的な現場訪問によるフィールドワークなどを重ねてきた。

そして今年度は、これまでの年代層すべてとなる、20〜60歳代までの全国1000名を対象として、いま、これからの生き方をとらえるためのアンケート調査を実施した。これまでの調査結果をもとに質問を改善した結果、さらに一歩踏み込んだ調査と、年代・世代を横断した新たな分析軸を見いだすことができた。

本誌ではHRIの調査から得た分析結果に加えて、子ども、若者、ミドルシニアの各世代の当事者、あるいは当事者と関係の深い4人の作家の方々に、彼らなりの世代論や生き方について筆を執っていただき、生き方をより深くとらえようと試みた。

## 作家の眼 × 調査の眼 //

### 子どもの育ちを支える社会を

阿部夏丸さん 彼の作品を読むと、この人は、とことん子ども時代に遊んでいる（いまでも、遊んでいる）と確信できる。だからこそ、子ども時代の素直な気持ちをよみがえらせてくれる。

デビュー作『泣けない魚たち』、『見えな敵』では、自分にもこんなことがあったとグツとくる。父のようにはなりたくない。では、大人としてガンと一撃をくらうかもしれない。私は以前、子どもにも必要な遊びは？と問われ、迷わず、大人の目から解放された遊びと答えた。公園、TVゲーム、スポーツクラブ、みんな大人の眼差しを浴びている。決して、それらがすべて不要なわけではない。子どもとの距離をいい塩梅にとり、すばらしい指導をしてくれている人たちも多い。しかし、子どもが見えない大人による監視ほど、子どもの育つ力を阻むものはない。

いま、弱者が狙われて凶悪犯罪に巻き込まれる中、つねに監視されている社会が人々に望まれるほど、安心が損なわれつつある。しかし、（言った）言っただけなら容易なことなのだが、子どもたちを閉じこめて安心を確保するのは、本質的な解決ではない。それではいつまで経っても、自律の力を備





えた人間は育たない。子どもに寄り添う優しさが必要だというのが、物理的にも精神的でも、つねにべつたり寄り添うことを優しさと思うのは大きな勘違い、子どもにとっては大きなお世話だ。

思い切って、子どもたちの疎開先、余計な大人社会の力に荒らされない、子どもを国をつつてみてはどうだろう。先の見えない社会を拓いていくのは、いまを生きる子どもたちなのだから。子どものパワーを邪魔するものを、取り除くことが大人の使命だ。

### 若者文化の新たな領域

金原瑞人さん 芥川賞受賞の金原ひとみさんの父親としても話題となった人だが、数々の児童書やヤングアダルト向けの作品を手がけてきた翻訳者だ。『ホトル・トーク』という本を読んだが、自分もスルッと作中に入っていくような言葉づかいが印象的だった。

彼は、子どもと大人の間に第三の層として誕生した若者が、大人からの新しい文化を受容し、子どもの感覚を持ちつつ発展させてきたことを、ポップ・カルチャーを例に語っている。すなわち、大人にならないまま文化を成熟させていく担い手が若者たちだということだ。

いま問題視されているフリーターやD

立された大組織に入って働きたくないと思っている連中も、少なからずいることを忘れてはならない。

堅い大組織は、かつて、強く大きな恐竜たちが氷河期を迎えて滅亡していったかのごとく、脆さを露呈するのではないだろうか。その頃、小さく弱い存在だったほ乳類たちが若者たちに重なるようになってくる。

### 「世代」の間を生きるミドルの価値

保坂和志さんは、団塊世代の後に生まれたミドル世代の当事者として、自分たちの学年の近くの世代をつねに「世代」に属さず、「世代」を持たなかったと振り返る。「遅く生まれすぎたか、早く生まれすぎた」という感覚は、何もネガティブなものではない。自分の人生において、自分が主体性を持った当事者であることなど些細なことだと語る。そのところが上の団塊世代には理解不能なのだろう。

保坂さんの作品とは、芥川賞受賞作『この人の鬨いき』で出会うが、「生きる喜び』『季節の記憶』、最近の『カンバセーション』『ス』といつも不思議な気持ちにさせられる小説だ。ひかひかがあるのかわからないが、よくわからないまま言葉がながって進んでいく。しかし、気になる何かが残り続けていた。

今回のマザーの、私は私を取り巻く

トという生き方も、働く場での若者文化として見ることが出来る。彼らがそういう働き方、生き方をひきずりながら大人になり、定着させ、再び未来の若者たちに投げかけるというように。そして、一昨年の調査で明らかとなった若者たちの指向する生き方のひとつ、フリーランスは、若者文化による働き方のポジティブな進化の姿に合致する。

組織の枠内に固定的に帰属してしまいうのでなく、組織の都合と自分の都合の折りあいをつけながら、あくまでも自分自身の場の中にバラバラに散らばったアトムではなく、意志と能を持つコアとしてつながりあいつながら生きていく生き方だ。

そう考えると、いま、多くの資源を投入して、行政も企業もこぞで大人の価値観の側から、若者たちの就業を支援しようとしている取り組みの有効性を少々疑う必要も出てくる。経済成長時代の働き方は、大人の価値観の吸引パワーが強大で、若者たちには抗いがたいものだった。だから、若者文化はポップ・カルチャーの場にとどまらず、しかし、経済成長が止まりつつある中、働く場においても若者文化が台頭し得る世の中に近づいているのではないだろうか。

若者たちは、仕事を知らないわけではない。知っているからこそ、ステータスの確信はなかるだろうか。

02年度のミドル世代の調査レポートには、企業の人事部門の方々からの反響や問い合わせも多かった。成果主義、収入減、仕事増、住宅、子どもの教育、ミドル世代サラリーマンにとって会社、家庭の重荷を背負いながらの生き方の方向転換は、強い慣性の力も加わって、彼らの自律した歩みを妨げる。そして、重荷は肩に食い込み、痛みも大きい。

しかし、彼らは踏ん張らないし、気張らない。なすがまま、なされるがまま、コンプレックスのようにつら流されてしまわないために目立たぬ根を張り、周囲の波に動きだけは同調しつつ生き抜くこととする。一方で「上世代」の処世術だ。だから、ミドル世代は「上世代」から見ると煮え切らない、頼りにならない存在だ。一方、下の世代からは自分たちから上の世代はみんな古い世代だと、ひと括りにされる。

ミドル世代の女性たちも時代の急転回にさらされている。都市部を中心とした40代の既婚女性には、専業主婦が多い。そ



れが、望ましいといわれる生き方だったが、だから、いまさら働くことと思っても納得できる仕事は容易には見つからない。「いまさら働け、何よ。私が悪いみたいな言い方しないでよ」と叫びたくなるのもよくわかる。屈辱的に安いパート仕事をすくくらいなら、子育てで自らの付加価値を明らかにしようとする母親が出てくるのも当然の成り行きといえよう。自らの生き方への迷いを消そうとする想いと、公立学校の壊滅的状况とが交錯して、偏差値と大学進学実績という数字の競い合いの中に、巻き込まれてしまっている。一方、父親たちは、そういう流れに立ちほだされるだけの自信も力もゆとりもなく、傍観者として佇むのみだ。

今回の調査では、28項目にわたる未来社会像に対する意見を求めたが、その結果、66～71ページ参照）、そうなると思う」という割合が最低だったのは、「塾に行かなくても学校で十分指導を受けられるようになっている」(10.5%)という項目だった。また、最も同意度が高かったのは、「専業主婦のいる家庭よりも、夫婦共働き」の家庭のほうが多くなっている(85.4%)である。

いま、ミドル世代の生き方は、守りに入って逃げ切るときなのか、新たな生き方へと攻め入るチャンスなのか、先の見えな

い世の中、しかし、まだまだこの先の時間を生きなくてはならない世代として、悩みは尽きない。調査結果にも、そのことが鮮明に表れた。これらの悩みは解消し得るのだろうか。もしかすると、数字の勝ち負けから、するりと逃れて、仕事の意味、生きる意味を求めて平坦としていられるのは、「なで肩世代」ならではの優れた能力かもしれない。

### 団塊世代による新・老人文化とは

三田誠広さんは、まさに団塊世代と真ん中を生きる作家だ。芥川賞受賞作『僕は何』は、私も大学入学した頃の、「何だろっ」と思ってたんだが、全共闘時代の大学生活物語くらいの印象だった。そして、今回もついで読んでみた。そこには、「僕を主張する僕」を求めて懸命に生きる姿が描かれているように感じられた。坂さんの主張との「コントラストもあり、その部分が際立った。

昨夏出版された著書『団塊老人』では、団塊世代の青春期からサラリーマン時代を振り返りつつ、明るい老後生活という未来が展望されていた。文中では、「いま晩年を迎えようとしているわたしたちにとって大切なのは、個人というものを離れた、大きなものを見据えることです。大きなものというのは、個人が帰属すべき集団と

いうことです」と主張し、「個人としての自立を目指しながら、最終的にわたしたちが向かっていくところはやはり何かしら大きなものではないでしょうか」と投げかけている。

生まれてこのかた、大組織文化ですと生きてきた団塊世代サラリーマンは、07年頃から始まる定年退職の後、やはり大組織への帰属に向かうのか。世代代表たる三田さんが、このように言い切っているのを読み、その確固たる世代文化に驚きを感じたほどだ。

この、大きなものとは、新たな「ミニニティー」をつくるのか、これまでの組織、会社(縁)を手放さぬままに生きるのか、それらがうまくいかずに、個人としての生き方に転じるのか、アンケートやインタビューからは、はきりよつかむところまでに至らなかった。しかし、とにかく量的に社会への影響力が強い塊であるだけに、今後の社会の方向づけを左右する大きな要因だ。

三田さんが期待を込めて訴えるように、世のためになる、大きなもの、という新たな「ミニニティー」が、若さと新しさを追い求める文化を身につけた団塊、バイオア老人によって生成されれば、世の中に明るさと豊かさを取り戻せるのかもしれない。新たな老人文化力の登場だ。

ところで、高齢社会の到来といっても、い

落とし穴が潜んでいる。

また、団塊世代(50代後半)や60代前半の、まだまだ元気なシニア世代層では、生き方・暮らし方に関する男女の意識差が、とても大きかったことも気になった。「居心地のよい場」「一緒に暮らしたい相手」「暮らしたの楽しみ方」など、とても日常的なライフスタイルで、男女間の大きな指向性の違いが表れた。また、これはシニア世代に限ったことではないが、「幸福感」において、圧倒的に女性が男性を上回っている。

「ニューファミリー」や「友だち家族」など、家族観においても、「新しさ」を指向してきた団塊世代の子離れ、会社離れ後の家族の絆のゆくえんも注目値する。目立つのは、女性たちの家族からの解放指向と、男性たちの家族や夫婦関係への求心指向という、ライフスタイルの指向性の大きな違いだ。自由を先行して獲得した団塊女性やシニア女性のこれからの生き方は、パドを外した「コシヤスな生き方」の心地よさを、世の中に広げていく可能性がある。

### 生きる意味の豊かな社会へ

もはや、価値観もライフスタイルも多様化し、世代論の有効性はなくなるといって論議も多い。確かに、かつての貧しい時代と比較すれば、表面上のスタイルや、個別欲

求の高齢社会の延長線上に、団塊老人社会を想定するのは間違いのようだ。01年のシニア世代調査や今回の調査で得た60代の方々の回答からは、概して「生きる」という力強さを感じられ、強肩の「怒り肩世代」と名づけていた。これに対して、団塊「ブレシニア世代」とくに団塊サラリーマン層の調査結果からは、上の世代に対抗して新しさを求め続けてきたが、実際には経済という現実の急流の中に吸い込まれてきたという、負い目を持った様子がうかがわれ、「パド入り怒り肩世代」と名づけていた。

先日、現在も要職に就いて活躍されている70代半ばの男性が、「いま生きているわれわれの世代は、丈夫なんです。子ども

の頃、学校の教室には、伝染病の子が平気でいたりした。いまだたらあり得ないでしょう。戦災を免れたといっていることは、運も強いはず。そんな強いのが残っているんだから、力強いのは当然なんです」と、話してくれた。

確かに、至る所で頑強さを発揮する元気な70代だ。しかし、いつまでも頑強さを持ち続けるというわけにはいかない。だから、これからの団塊老人が加わる高齢社会は、新たな展開をするかもしれない。いまのような心身ともに丈夫な世代の人々による、強さのある元気な高齢社会を前提にはし切れないところに、近未来社会の

求に関わる価値観は多様化が進んでいる。しかし、この4年間の調査結果を一覧すると、世代による生き方の特徴は、いまだ明らかに存在するといえよう。そして、そもそも「ひびく」気がつくことはいまの日本社会に暮らす人々が、もの心つく頃に過ごした時代が、日本社会の戦後復興期からバブル経済期を経て、経済停滞期の現在に至る、経済成長のロジスティック曲線(S字カーブ)の成長曲線(の各部)にちょうどあてはまる、といつことだ。そして、日本社会はS字を描き終えて、次の座標にシフトしようとしている。

上田紀行さんが近著『生きる意味』で主張されていた表現を借りれば、「数字」から、意味への座標の転換ともいえるだろう。いままで、自明であったことが自明でなくなるという生きづらさも伴うだろう。しかし、新たな座標系には、一部の勝ち残り組だけがシフトできるといっているので、豊かな明日の社会は望めぬ。

巷では、会社はだれのものかをめぐって騒がしくなっている。60代後半の経営者と30代前半の経営者の「正しさ」という価値観のギャップは甚だ大きい。しかし、前者の正しさが、これまでの日本を築いてきた。後者の正しさは、これからの日本を築くも、のだといつことは間違いなし。事ほど左様に、S字カーブの上下間の差は大きく、そ







のままぶつかりあってもらちが明かない。では「上」をつなぐ中程ではどうだろう。伝統こそ最大の価値であったらう。皇室でも揺らぎが生じているようだ。まさにミドル世代の皇太子殿下は、先日45歳の誕生日の会見で、「この家庭でも同じように、世代間に考え方の相違はあると思います。しかし、そういうことは話し合いを続けることにより、おのずと理解が深まるものと考えます」と述べられた上で、心あたたまる詩を披露されていた。

いま、同時代を生きる人々の間で、これらのことが起きているということが、まさに転換期の日本社会を象徴している。みんな同じだ、という考え方は、解決策を見いだすに、みんな違うのだから、そう、つなぐ価値と意味がある。異なるままに、共に生かす社会とは、東洋の古代思想「晏荼羅」にも通じる。次の座標系を正しく見定め、みんなで幸せなシフトを果たそう。

### ネットワーク社会から ネットノットワーク社会へ

直方向だけでなく、水平方向の流れが生まれた。ネットワーク社会という新たな世界の枠組みが到来し、ビジネスのみならず、生活のそこそこに至るまで、ネットワークが新たな価値基準をつくり出した。そして21世紀が幕開けたいま、ネット・ワーキング(Knot working)という新しい言葉が胎動し始めている。これはフィンランドの活動理論や学習理論の研究者であるエンゲストロームらが提唱する「ネット・ノットワーク」の場では、人々は即興的に相互の関係を結びあたり、ほどいたり、編み直したりしながら学習を広げ、高めていくと実証的に述べている。その結び目(ノット)が変化し続けるダイナミックな場の関係性を「ネット・ワーキング」として表現している。私自身、この「コンセプト」を新たな結び目から知り得て、新たな展望の可能性をつかんだ。

日本社会も大きな枠組みの転換期にある。それぞれの世代文化を背負いつつ、流動的な価値観のもと、自明性も失いつつある中、人々は多くの不安とわずかな期待を持って明日に臨もうとしている。だからこそ、これから求められるのは、ダイナミックに変化する「結び目」から、新たな価値を生むことだ。時代は、ネットワーク社会から「ネットノットワーク社会」へと、明るい兆しを求めて動いている。

## 作家たちの世代論

研ぎ澄まされたセンシング力で、人の心や場の気配をくみとり、それを言葉で描き出し、人の心に伝えかける小説家の創作活動。それは、私たちの生き方の描写といえよう。本レポートでは、それぞれの世代の当事者、あるいは当事者と関係の深い立場にもある4人の作家の方々に、定量的な調査結果からだけでは感じとりにくい、しかし大切な部分を表現していただいた。

大人と子どもの違いをわかった上で、子どもになれる小説家

阿部 夏丸さん

大人にならないまま成熟する若者たちを理解できる翻訳家

金原 瑞人さん

世代に属さないから気づける感性で表す小説家

保坂 和志さん

等身大感覚で団塊世代の生き方を表現し続けてきた小説家

三田 誠広さん

